広報 すぎなみ
Suginami
みどり豊かな　住まいのみやこ
11/15
令和8年（2026年）
No.2441

熟考の一手を重ねて つかみ取った夢。

幼い頃から阿佐谷の将棋教室に通い、いつしか「将棋のプロになりたい」と思い描くようになった古井丈大さん。今年4月に四段昇段を果たし、プロの世界に入りました。厳しい夢への道中を支えたのは「将棋が好きだ」という気持ち。そんな古井さんに将棋の魅力・プロとしての思いなどを語っていただきました。



特集
すぎなみビト

将棋棋士四段
古井 丈大

発行：杉並区 | 〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1　代表TEL：3312-2111 | 編集：広報課　TEL：5307-0339　FAX：3312-9911

「広報すぎなみ」は月2回（1・15日）発行。新聞折り込みでの配布のほか、区施設・区内各駅などの広報スタンドに置いています。
入手が困難な方には個別配布をしています。ご希望の方は、電話・ファクス・申し込みフォームからお申し込みください。

詳細は、区HP（右2次元コード）をご覧ください。

他の道はない！　何が何でも将棋でプロに なると強く思い続けてたどり着いた



すぎなみビト
interview

古井 丈大

将棋棋士 四段

プロフィール：古井丈大（ふるい・じょうだい）平成16年杉並区生まれ。都立豊多摩高等学校卒業、中央大学経済学部在学中。小学2年生で将棋を始め、成田山新勝寺の子ども名人戦で優勝するなど実力を発揮し、中学1年生で棋士を養成する日本将棋連盟の機関「奨励会」に入会。入会から約8年半を経て令和8年4月に念願の四段昇段、プロデビューを果たした。好きな駒は斜めに大きく動ける「角」。将棋以外では鉄道が好きで、特に発車メロディーなど音への関心が深い音鉄として鉄道を楽しんでいる。



小学2年生で将棋と出会い夢中になった

―古井さんはいつから将棋を指すようになったのですか？

初めて将棋を指したのは小学2年生です。自分は幼少期から一つのことにすごく熱中するタイプで、幼稚園児の頃に折り紙に熱中したときは、折った作品で段ボールが1箱埋まるほどでした。友達から将棋をやっていると聞いて「子どもでもできるんだ…！」と興味を持ち、自分でもやってみるようになったら楽しくてあっという間に熱中していきました。もっと強くなりたいと思って小学3年生で通い始めたのが、阿佐谷にある将棋教室・棋友館です。そこで館長であり指導棋士の資格を持つ小田切秀人先生に出会ったことは、自分の中でとても大きな出来事でした。

―小田切先生は古井さんにとってどのような先生でしたか？



▲小学校高学年頃の古井さん

初めて教室に行くと、まず小田切先生の指導対局を受けるところから始まります。先生が生徒3人を同時に相手にして対局する三面指しでは、他の生徒2人は早指しですぐに対局が終わる中、自分は次の一手を決めるために長く考える長考派なんですが、その間も急かすようなことはせずにじっと待ってくださいました。そんな先生の指導のおかげで、じっくりと考える地力がついたと思います。また、将棋以外の礼儀などもいろいろと教えてくださり、先生のもとで人間としてもすごく成長できました。

―棋友館で腕を磨く中でプロを意識したのはいつ頃だったのですか？

小学4年生くらいのとき、「将棋を職業にできるんだよ」と人から聞いて、初めて将棋のプロである棋士という存在を知りました。その頃は自分もアマチュア二段くらいの実力がついていて、子ども心に「こんなに楽しいものを仕事にしていいのか」と興味が湧いて、自分も棋士になってみたいと考えるようになりました。

―棋士を目指して、どのような練習の日々を過ごしましたか？

教室で対局を重ねて練習するほか、一方で指したら反対側にまわって指すという、先手と後手の一人二役をやりながら対局する練習を家でよくやっていました。戦術書を読んで研究したりもしていましたね。

棋士への狭き門 厳しい道のりの中で

―棋士への道というのはかなり厳しいものだったと思います。

プロである棋士になるためには棋士の養成機関である奨励会に入り、6級からスタートして四段に昇段する必要があります。四段の手前の三段では半年ごとにリーグ戦が行われ、そこで上位2名に入ると昇段できるので、年間でプロになれるのは基本的に4人だけ。自分は中学1年生で奨励会に入会して、6級から初段までは順調に昇級・昇段し、その後3年ほどかけて三段まで上がりました。三段での期間が3年半と長く、苦しい時間も少なくありませんでした。リーグ戦ではここ一番というところでなかなか勝ち切れないことが続いてもどかしかったし、半年かけて戦っても成績が振るわないと「半年間を無駄にしてしまった」という感覚にもなりました。そして、四段昇段が26歳までという年齢制限もプレッシャーになっていたと思います。



―苦しい時期にどのようなことが支えになりましたか？

何よりもまず「将棋が好き」という気持ちが原動力としてあったと思います。将棋が好きだという気持ちを心の奥底にずっと持ち続けることができたのは大きいです。もちろん、家族をはじめ高校・大学の友人の励ましや、棋友館の先輩・仲間たちの後押しも大きな力になりました。他の道は考えられない、自分は何が何でも将棋でプロになるんだと強く思い続け、最後のほうはいい意味で開き直って「楽しんでやろう！」と前を向くようになっていきました。それが良い方向に働いた気もします。

―念願のプロデビューを果たしたときはどのような気持ちでしたか？

四段に昇段すると知ったときは全然実感が湧きませんでした。三段リーグで対局することが日常になっていたので、自分が本当にそこから抜けられるのか？　と不思議な心境でした。お祝いの連絡などをいただいたりして徐々に実感が湧き、目標としていたところに到達できたことがすごくうれしかったです。同時に、これからが本当の戦いでもあるので、また気を引き締めていこうという気持ちにもなりました。

ずっと共に歩んできた将棋への思い。未来への思い

―古井さんが考える将棋の魅力とは何ですか？

果てしない奥深さでしょうか。将棋は強くなればなるほど、やればやるほど、分からないことが増えていきます。未知の世界がどんどん広がっていき、どんどん面白くなるんです。一つの戦術を突き詰めようと思ってもそう簡単には結論が出ません。そこを突き詰めていくことに楽しさがあると感じます。将棋と聞くと難しいものだというイメージを持たれる方も多いと思いますが、ルール自体は難しくなくて、覚えてしまえば小さな子どもでも誰でも楽しめます。そんなところも魅力ではないでしょうか。

―将棋と向き合ってきた13年間を改めて振り返ってみて思うことはありますか？

この13年間もし将棋をしていなかったら…？　と想像してみても、もう想像できません。将棋が自分の人生そのものという感じになっています。日頃から何をしていても頭の片隅に将棋盤が浮かんでいます。将棋をしていたから出会えた人・生まれたつながりは数え切れません。棋友館や奨励会での出会いだけでなく、大学で所属する将棋部の友人の存在も大きいです。三段リーグで勝てなくて息苦しくなっていたとき、大学の友人と将棋を指す時間は、将棋本来の楽しさを思い出させてくれるひとときでした。これまでの13年間、本当にたくさんの人と出会い、励まされてきたなと感じます。

―プロとして今後どのような棋士を目指していきたいですか？

自分は三段リーグで3位を2回獲得した特例で四段に昇段したので、言ってみれば一段低いところからのプロスタートです。だから、まず今年度中にしっかりと成績を上げて皆さんに追いつくことが目の前の目標です。戦術面では、手堅く守って勝ち切るような展開が得意ですが、激しい攻め合いの中でギリギリの差で勝つような勝ち方も自分のものにしていき、勝ち幅を広げていくことも課題です。そして長期的な目標としては、いろいろな棋戦（大会）で優勝など結果を残しながら、何歳になっても情熱を持って戦い続けられる、そんな棋士になっていきたいです。

―将棋をはじめ、今何かに熱中しながら頑張る子ども達に向けて古井さんからメッセージをお願いします。

上達には何よりも楽しむことが一番大切です。楽しむ気持ちをいつも忘れず、自分に合う練習方法を見つけて頑張ってほしいです。あとは、やはり仲間を大切にということも伝えたいです。子どもに限らず何か一つのことに熱中している、夢・目標を持って頑張っているって、それだけですごく幸せなことだと思います。辛くなるときもあるかもしれないけれど、好きな気持ち・楽しむ気持ちを大切に努力していけば、きっとたどり着きたいところに近づくのではないでしょうか。



すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。